

# 景観フォーラム

## 巻頭言

3月21日は春分の日です。春分の日に関東平野ではかなりの雪が降りました。つぼみを開き始めた桜の花も一休みということでしょうか。3月24日土曜日に景観あまちあるきを渋谷で計画しておりましたが、渋谷区役所の都市整備部まちづくり課という部署から土曜日は出勤できないということで冷たく断われました。そこには市民へのサービス精神というものが全く感じられず、渋谷区役所のまちづくり活動と称するものにかかなりの疑問を呈することになりました。47年前からの渋谷駅前を知っている者にとって、渋谷駅前の景観とコミュニティの在り方がなぜ年々悪化しているのが理解できませんでした。47年前の渋谷駅前の景観は現在よりもずっと緑化されており住民にとっては現在よりも良い空間であったと思います。渋谷区役所は住民を全く無視することによってまちづくり活動を行ってきたというのが現在の渋谷駅前景観でしょう。全く残念なことです。

さて、このような役所と国民の関係というのが一体どのような関係にあるのかを考えてみますと、その答えは役所というものは国民から徹底的に税金を取り立てて、その役所はその税金をどのように使っているのか国民にはよくわからないようにしてあるということではないでしょうか。国会で問題になった“書き換えと改ざん”問題がまさにこのことの証明ではないでしょうか。“書き換え”とは単にAという事実の表現を変えるということとで実際は変えてはいないということでしょう。ところが、“改竄(かいざん)”とは、Aという事実をBという事実に変えてしまうことで、何があったかという過去の真実を変えてしまうことであり、これは歴史への不当な謀略と言えるでしょう。このようなことが国家権力の最高位の部分で起きているというのであれば、どの役所でも起こりうるということになります。この現象は、国家という組織の崩壊につながりうるということであり、権力を持ったもののみが歴史の真実を知ることが出来ることになり、改竄を書き換えとしてしまうことは、まさにこれは民主主義制度が崩落に向かっているということでしょう。

今から75年ほど前の日本という国家はこの単純な国民の知る権利ということが実施されておらず、即ち、民主主義制度は履行されておらず、広島・長崎への原爆投下という真実を知ることにより終戦を迎えたということでしょう。まともな情報開示というあり方が保障されていない国では、まともなコミュニティ活動などではいられないでしょう。“景観から考えるまちづくり活動”とは、このまともなコミュニティ活動こそ前提となるものではないでしょうか。

NPO法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦

## <日本景観フォーラム2018年度(平成30年度)年間スケジュール>

\*2018年度とは2018年4月1日⇒2019年3月31日のことです。

### 2018年

- 4月18日(火) 第1回理事会・総会 於JICA研究所
- 5月26日(土) 第1回景観まちあるき(香取市佐原)
- 6月26日(火) 第1回景観研究会: 建造物の高さと景観 於JICA研究所
- 7月17日(火) 第2回景観研究会: 建造物の高さと景観(2) 於JICA研究所
- 8月 夏休み(景観研究自由参加) or 一泊二日で遠方の町並み見学会など?
- 9月25日(火) 第3回景観研究会: 道路と景観 於JICA研究所
- 10月27日(土) 第2回景観まちあるき(桜川市真壁)
- 11月20日(火) 第2回理事会 於JICA研究所
- 12月13日(木) 忘年会(場所未定)

### 2019年

- 1月26日(金) 第4回景観研究会: 都市美と景観 JICA研究所
- 2月14日(水) 第5回景観研究会: 都市美と景観(2) JICA研究所
- 3月24日(土) 第3回景観まちあるき(桐生市桐生新町)

## 良い景観や都市環境づくりの問題意識を持つことから再スタート

野田 路人 (インテリアアーキテクト)



この度、会員に加わらせて頂くことになりました野田路人と申します。物を作ることが好きで、大学で建築を学び、卒業後、設立1年目のインテリアデザイン会社に入社、その会社での43年間のサラリーマン生活を3年前に卒業し、現在は自由人として日々を過ごしております。会社では集合住宅やホテルなどの建築設計、高層ビルのオフィスインテリアデザインやサイン計画、家具デザイン、造園計画など広範囲にデザイン業務に携わりました。

近年は何か世の中に役立つことが一つでも出来ないか？都会に少しでも緑をとの思いもあり、プランター菜園での無農薬野菜作りなどの活動にも参画しておりました。

今回入会にあたり、学生時代、都市とは何か？良い景観とは？建築と人間の関わりは？などに思考を繰り返し、定性的な景観を定量的に評価する方法を模索したことなどが蘇ってきました。

景観は構成するエレメント（人間対建築物、車、樹木、オープンスペース）の有り方や人間の視覚法則や視覚能力、歴史的時間の経過の評価にも目を向ける必要だがあります。多くの場合、人工的なものを嫌い、逆に自然的なものを好むことを検証した経験がありますが、人間も自然の産物、建築物や工業製品もその一つと捉え「人間対自然」と対峙ではなく「人間と自然」として向き合うことが大切だと考えております。

良い景観や都市環境を作る為には、多くの方が問題意識を持ち、それを向上させ、自分達が自らの手で作り上げ、後世に伝える姿勢が大切だと思います。

この入会の機会に学生時代に読み書棚で埃をかぶったまま置かれたガレット・エクボ著の「景観論」を改めて読み直しなどして、良い景観や都市環境づくりの問題意識を持つことから再スタートしたいと思えます。

## 熊谷守一のこと①

熊谷守一展「熊谷守一 生きるよろこび」(2017年12月1日-2018年3月21日)をみて

熊谷守一は画家である。しかし、有名な画家であるとは言い難い。1880年生まれで、1977年に97歳という高齢で亡くなった洋画家で、かの有名な青木繁(1882-1911)と同世代である。が、その絵は単に洋画と言い切ってしまうには、余りにも豊かな芸術である。世界でもあまり目にすることない絵画というか、一般的にはあまり有名ではないのである。彼の存在は80歳を過ぎてから良く知られるようになり、1968年の文化勲章を辞退したことで世間の話題になった。彼の人間としての生き方も実に独特だが、その創造した世界は恐らく今後ますます人口に膾炙してゆくのではないかと。というのは、その絵はますます現代人に訴える何ものかを持っている。即ち、実に現代的なのである。今回はとりあえず、彼の言葉から入ってきたい。まず彼にとって絵を描くとは？

私は、好きで絵を描いているのではないんです。絵を描くより遊んでいるのが一番楽しいんです。石ころ一つ、紙くず一つでも観ているとまったくあきることがありません。

彼の絵で、まず目に飛び込んでくるものは何かと言えば、その素晴らしい色合いである。

影がたくさんありますわね。あの影をよしてしまうんですわ。色の寄せ集めでけっこう代用する(できる)と思います。実際影というものは、陰気なものでしょう。そこを影のない色を寄せ集めれば、困るほど影が出てくる。そのほうは、実際の影より陰気じゃないですわ。

そして、その絵画のモチーフというものをどのように考えていたか。

たとえばこの作品では魚があつて人がいるけれど、描いていることはそうではない。自身はさういうことではないつもりです。例えば赤いものがあつて、色だけで見ても良いのですし……。これは鯛けれども誰も承知しない。魚と見なくても良い。或る量の白いものと赤いものと、そういう風にもっていつて成り立ちます。

しかし、熊谷の絵画がまともに彼が述べるようなところにたどりついたのは、その長い人生でおおよそ3回の展

開があつたと言えよう。まず美大から30代まで、40代から70代まで、そして80代から90代後半まで。我々が良く目にする熊谷芸術は後半のものであるが、その創造のオリジナリティが始まったのは何と還暦を過ぎてか

らのものであつた。確かに、アンリ・マチス、後期印象派などの影響が見られないわけではないが、それはほん

の参考程度というか構図の在り方程度のものではなかつたろうか。

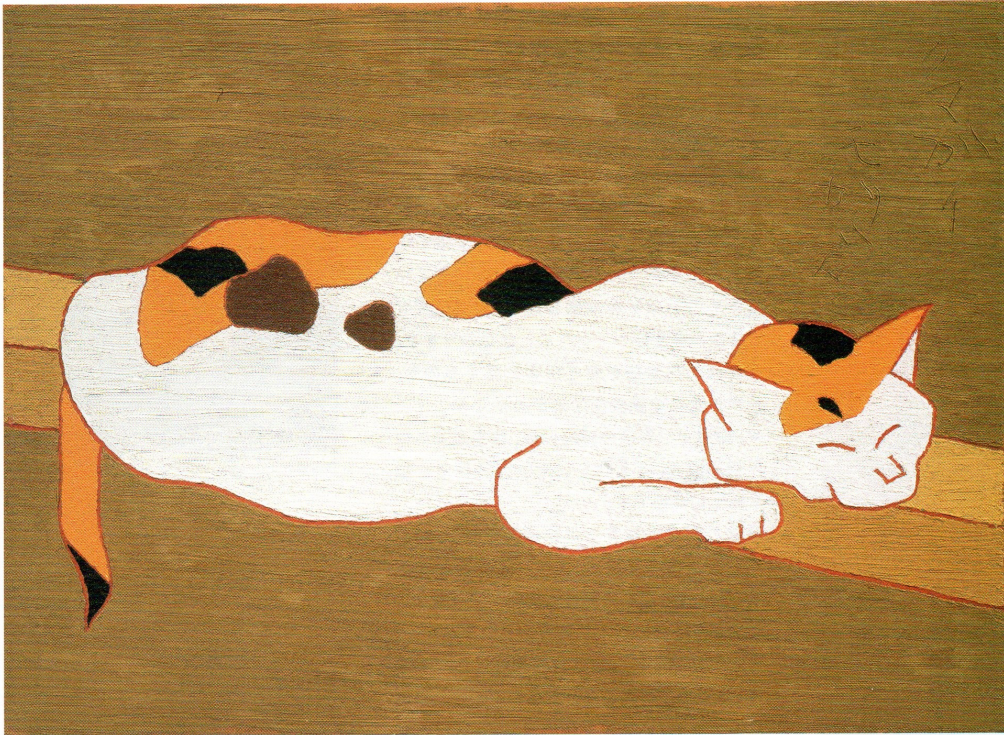
97年という長い人生の中には日清・日露戦争、そして第一次・第二次世界大戦という大事変もあつたろう。が、こうまでも己のスタイルを貫き通せた熊谷守一の人生観とは、余程の自己を客観視できる何か強い自己があつたのではないかと。熊谷の人生を考えると、やはり志賀直哉(1883-1971)のことをふと考えざるを得ないのであり、そして、やはり夏目漱石(1867-1916)のことも考えざるを得ない。

ともかくも、彼の絵画を観て頂きたい。

出来れば画集ではなく本物を観て頂き、その色と形を楽しんで頂きたいのです。(小淵 洋)



熊谷守一のこと①



没後40年

熊谷守一

熊谷守一 生之喜悅

KUMAGAI MORIKAZU  
THE JOY OF LIFE

2017年12月1日(金)ー

2018年3月21日(水)祝

開館時間=10時-17時(金、土曜日は20時まで)  
入館は閉館30分前まで  
休館日=月曜日(ただし1月8日、2月12日は開館)、  
年末年始(12月28日-1月1日)、1月9日(火)、2月13日(火)  
主催=東京国立近代美術館、日本経済新聞社、テレビ東京  
協賛=大日本印刷  
出品協力=愛知県美術館、岐阜県美術館、熊谷守一つち記念館、  
天童市美術館、豊島区立熊谷守一美術館  
特別協力=柳ヶ瀬画廊

December 1, 2017 - March 21, 2018

Hours: 10:00-17:00 (Fridays and Saturdays open until 20:00)  
Admission until 30 minutes before closing  
Closed Mondays (except January 8 and February 12),  
December 28 to January 1, January 9, and February 13



東京国立近代美術館  
The National Museum of Modern Art, Tokyo



쿠마가이 모리카즈 삼한의 기쁨

生きるよろこび



## 熊谷守一のこと①



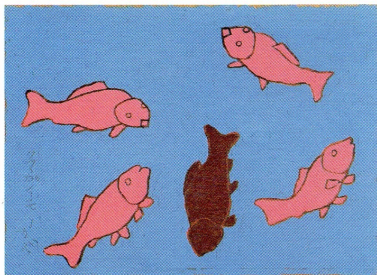
1



2



3



4

1 《ハルシヤ菊》1954年 愛知県美術館 木村定三コレクション  
 2 《朝の日輪》1955年 愛知県美術館 木村定三コレクション  
 3 《ヤキバナカエリ》1956年 岐阜県美術館  
 4 《稚魚》1958年 天童市美術館  
 表面上《猫》1965年 愛知県美術館 木村定三コレクション  
 表面上《鬼百合に揚羽蝶》1959年 東京国立近代美術館

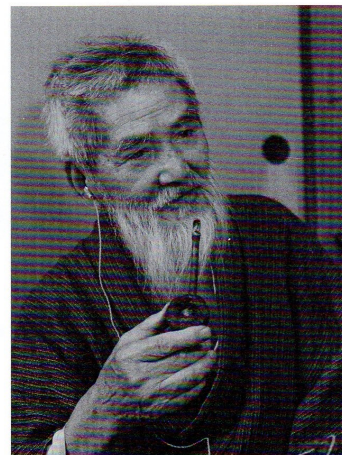
熊谷守一(1880-1977)は、明るい色彩とはっきりしたかたちを特徴とする作風で広く知られます。特に、花や虫、鳥など身近な生きものを描く晩年の作品は、世代を超えて多くの人に愛されています。

その作品は一見ユーモラスで、何の苦もなく描かれたように思えます。しかし、70年以上に及ぶ制作活動をたどると、暗闇でのもの見え方を探ったり、同じ図柄を何度も使うための手順を編み出したりと、実にさまざまな探究を行っていたことがわかります。描かれた花や鳥が生き生きと見えるのも、色やかたちの高度な工夫があつてのことです。穏やかな作品の背後には、科学者にも似た観察眼と、考え抜かれた制作手法とが隠されているのです。

東京で久々となるこの回顧展では、200点を超える作品に加え、スケッチや日記などもご紹介し、画家の創造の秘密に迫ります。明治から昭和におよぶ97年の長い人生には、貧困や家族の死などさまざまなことがありました。しかし熊谷はひたすらに描き、95歳にしてなお「いつまでも生きていたい」と語りました。その驚くべき作品世界に、どうぞ触れてみてください。

Kumagai Morikazu (1880-1977) is widely recognized for a style that is distinguished by bright colors and distinct forms. His later works, depicting familiar living things like flowers, insects, and birds, are especially loved by people of all ages.

At first sight, these works look humorous and seem to have been created with great ease. But in tracing back Kumagai's over 70-year career, it becomes clear that he actually experimented with many different approaches, making paintings to see how things could be seen in the dark and developing a process to use the same design in multiple works. The reason Kumagai's flowers and birds have such a lifelike appearance is due to the artist's ingenious means of dealing with color and form. Concealed within his works are an observational ability akin to that of a scientist and an elaborate production method. This retrospective, the first to be held in Tokyo in many years, sheds light on the artist's creative process with more than 200 paintings, sketches, and diaries. During his long 97-year life, which began in the Meiji Period and continued late into the Showa Period, Kumagai experienced a variety of hardships including poverty and deaths in the family. Yet he single-mindedly devoted himself to his work and, even at the age of 95, said, "I hope to live forever." Don't miss your chance to visit Kumagai Morikazu's remarkable world of art.



熊谷守一 Kumagai Morikazu 撮影：日本経済新聞社

### ●講演会

12月16日(土) 14:00-15:30

蔵屋美香(本展企画者)

\*先着150名、申込不要、聴講無料

1月13日(土) 14:00-15:30

岡崎乾二郎(造形作家、批評家)

\*先着150名、申込不要、聴講無料

2月24日(土) 14:00-15:30

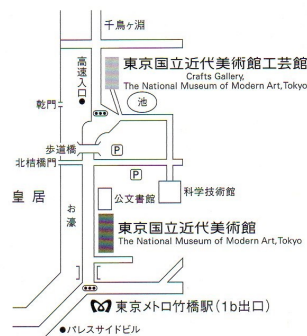
高畑勲(アニメーション映画監督)

\*当日10:00より受付にて先着150名様に整理券を配布、聴講無料、要観覧券 聞き手：蔵屋美香

場所：東京国立近代美術館講堂(地下1階)

開場：開演の30分前

詳しい情報はホームページをご覧ください。



### ○アクセス

東京メトロ東西線竹橋駅1b出口 徒歩3分  
 〒102-8322 東京都千代田区北の丸公園3-1  
 美術館には駐車場がございませんので、公共の交通機関をご利用ください。

Directions: 3-minute walk from 1b exit, Takebashi station (T08), Subway Tozai Line  
 Address: 3-1 Kitanomaru-Koen, Chiyoda-ku, Tokyo 102-8322

お問い合わせ：03-5777-8600(ハローダイヤル)  
 美術館ホームページ：http://www.momat.go.jp  
 展覧会特設サイト：http://kumagai2017.exhn.jp/

同時開催：所蔵作品展「MOMATコレクション」(4F-2F) 2017年11月14日(火)ー2018年5月27日(日)



## <LFJブックレビュー57>

『歴史と文化の町並み事典』文化庁編 中央公論美術出版社 2015年刊

景観とは人類のコミュニティの営みの反映であるとするなら、それは正に歴史そのものを鑑みることであり、人類の発明などによってもたらされた文明に基づいた文化活動がどのようになされてきたかを考察することであると言えよう。東京近郊都市の駅前に、また古都としてある鎌倉の駅前にあるマクドナルドレストランはなぜ我々の前に生じているのか。これは文明として受容せざるを得ないのか、否、日本の歴史的文化を優先するという観点からは、少なくとも鎌倉の駅前からは撤退させるべきではないか、という議論が頻繁に生じているのが昨今の景観行政の本音であろう。効率を優先するのが文明の根幹であるとするなら、その暴走を緩和させるのが文化の知恵というものであろう。即ち、歴史はそのように創造されてゆくものであり、E・H・カーがいみじくも言っているように「歴史とは過去と現在の対話である」ということになる。

この書は文化庁が編集し、その序文と編集方針は彼らの文言である故、何の変哲もないのは否めないが、2015年8月の出版当時、109の重要伝統的建造物群保存地区に関するそれぞれの説明は実にうまく整理要約されている。

先ず、「刊行のこぼれ」であるが、戦後、急速な高度経済成長で全国津々浦々に綿々と受け継がれてきた伝統的な住環境が次々に失われていくことに対する社会的な懸念や関心の高まりを受けて、1975年文化財保護法の改正により“伝統的建造物”が文化財の新しい類型の一つに加えられることによって誕生し、新たに“伝統的建造物群保存地区”が創設された。1976年に7地区を選定して始まった“重要伝統的建造物群保存地区”は、40年後には全国109か所に広がった。

次に「伝建制度」の説明として、1) 背景、2) 特色、3) 効果と近年の動向、4) 運用と地域社会、5) 伝建制度における人々のつながり、6) 伝建地区の保存と地域振興、としてこの制度を説明している。そして具体的には全国43道府県89市町村109地区の保存地区を見開き2ページに写真と文章で簡潔にまとめている。

巻末には資料編として、「伝統的建造物群保存地区の制度」として1) 制度の仕組みとして伝統的建造物群やその地区の定義、どのように決定し保護するか、そしてその中の重要伝統的建造物群保存地区をどのように選定するか等を説明している。また、2) 現状変更に係る規制、3) 保存計画と建築基準法緩和条例、4) 保存対策調査 5) 保存地区への支援内容が説明されている。また「重要伝統的建造物群保存地区一覧」が選定順に掲載され、「重要伝統的建造物群保存地区選定数の推移」そして「伝統的建造物群への文化庁の予算の推移」があり、以上の制度内容を「伝統的建造物群保存地区制度フローチャート」として示し、各地域住民が実際にどのようにこの制度を運用していくのかを活動指針として示している。しかし、重要伝統的建造物群保存地区の選定基準とは実に簡単なもので 1) 全体として意匠的に優秀なもの 2) よく旧態を保持しているもの 3) 周囲の環境が地域的特色を顕著に示しているもの 以上である。(斉藤全彦)



## 天地玄黄 ⑩「東京の景観考。看板は都市に必要なノイズ。」

2020年東京オリンピック開催にむけ、東京の景観はどのように変化していくのか。

「東京は屋外広告物によって支配されている」

「日本の風景を殺している半分の犯人は看板である」

「看板は視覚公害だ」

看板は、景観を害する代表物として批判的になっています（屋外広告物＝看板）。

また「建築家など開発者側が、好き勝手なデザインの建築物を無秩序に立て続け、景観を悪くしてしまった」として、屋外広告物だけでなく都市計画そのものを批判している識者もいます。

こうした批判の原点は、ヨーロッパを都市計画のお手本とする旧態依然とした欧米至上主義の思想から抜けきれないことにあります。フランスの建築家ジャン・ヌーヴェルは、篠原一男との対談のなかで、東京をヨーロッパの都市と比べて卑下することに対して「昔風の古い調和概念」であるとし、1つのパターンで都市をデザインするというヨーロッパの既存の手法には限界が来ており、東京を「21世紀を予言する都市の1つのプロトタイプ」として捉えていると発言しています（篠原・ジャン・ヌーヴェル1998）。

「20世紀が発明してきたもの、例えば高速道路、あるいはサインの問題が最も直截な方法で表れ」しており、「対立する概念、価値、あらゆるものが混合したかたちで出てくるのが、私の考える20世紀のアーバンイズムであり（中略）それは東京に代表される日本の都市だろう」と述べているのです。

東京の都市景観を、「混乱の美」と称し、「現代の都市はカオスの美以外を表現できない」と一貫して提起してきたのは、建築家の篠原一男。1981年「プログレッシヴ・アナークィ」という言葉を用いて、「混乱」を単に否定するのではなく「ここまで到達した<文化>」として位置づけています。



東京の都市景観を例える際に「カオス（混沌）」の語がよく使われます。これを「美観」に相反する言葉と受け止める場合が多々あるのですが、世界的に評される「東京カオス」は、決して悪評ばかりではありません。世界的な建築家から観光客に至るまで、ほかのどここの国にもない「最先端」が高密度に凝縮された都市として、憧憬の念を抱いて発せられる言葉でもあるのです。なぜなら、東京カオスとは、あくまでビジュアル面のみを形容した言葉で、治安や経済といった社会的な安定という土台の上に成り立っているからです。つまり、本来の意味でのカオス状態ではなく、建物から屋外広告物に至るまで、その1つ1つが時として過剰ともいえる個性、それらが集積していることを表しているのです。

景観を壊すと言われる看板。看板を排除すれば「良好な景観」に近づくのでしょうか。

ボクははそうは思いません。看板がなくなった途端、街は無個性な街に変貌します。看板は街の賑わいを演出する舞台装置であり、経済活動には欠かせないアイテムです。

看板を排除したら建築物の美しい姿が現れてくるのか？むしろ建築物の不調和を看板が化粧をするようにカバーし、メイクアップ効果で華やかな賑わいを与えているとは考えられないでしょうか。

極論ですが、周囲と調和しないことが景観を乱すノイズとするならば、建築物自体が視覚的ノイズとして今度は集中非難を浴びるでしょう。そうなれば、今度は建築物すべてを取り壊せばいいのか。そして、それを東京中のすべての建築物に当てはめれば、すなわち美しい、良好な景観になるのでしょうか。それは多様性に富んだ東京を否定し、単調な枠組みに押し込めようとする愚行でしかありません。

成長する都市としてあり続けるには複雑化・多様化せざるをえないのです。



ソース：「看板キッド、高橋芳文のブログ」



〒150-0031

東京都渋谷区桜丘町14-5-502

TEL：03(3780)3814

FAX：03(6379)6681

E-mail：info@keikan-forum.com

URL：http://www.keikan-forum.org



Landscape Forum of Japan